

へき地校におけるミュージッキングの実践

— 複数のへき地校をオンライン会議システムで結んだ集合学習 —

壽谷 静香
(美作大学短期大学部)

芳賀 均*
(北海道教育大学旭川校)*

安久津 太一**
(岡山県立大学)**

芳賀 真衣***
(浜頓別町立浜頓別小学校)***

Practicing Musicing in Schools in Remote Areas-Group Music Learning by Connecting Multiple Schools in Remote Areas With an Online Conference System

Shizuka SUTANI, Mimasaka University Junior College
Hitoshi HAGA*, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education
Taichi AKUTSU**, Okayama Prefectural University
Mai HAGA***, Hamatombetsu Elementary School

概要

北海道宗谷管内と岡山県北部山間部という、距離の大きく離れたへき地の学校同士、さらに大学ともオンライン会議システムで結んだ形で、「連詩」「ふしづくり」および「ミュージッキング」の融合的な創作活動を行った。へき地の人的資源の補助や、児童の学習環境に変化をつけることによる学習意欲の向上等に資する刺激をねらった。その際、へき地・小規模校教育における授業方法の活用を図り、「集合学習」の考え方を取り入れた。実践の結果、複数のへき地校をオンライン会議システムで結んだ集合学習による活動が、達成感や、自他の比較による学びによる学習意欲の向上、また、視野の拡大、相手への関心や敬意につながる事が示唆された。

1 はじめに

本稿では、「連詩」「ふしづくり」および、筆者等が実践者として協同して取り組んでいる、音楽を行為と捉える「ミュージッキング」の融合的な創作活動を、遠隔会議システムを活用して、2校のへき地校同士の集合学習として行った事例を取り上げる。

双方のへき地校においてそれぞれが積み重ねてきた経験を生かすことを考慮しつつ、本実践以前から双方の学級に関わってきた大学教員による支援や指導を伴う形で、双方の学級の経験の拡張を、また、交流を行うことを企図した。

活動としては、「ミュージッキング」(〈2 (1) ①〉で後述)と、「連詩」(〈2 (2) ①〉で後述)および「ふしづくり」(〈3〉で後述)とを組み合わせた形で行う。

なお、本実践以前に、オンラインによって一校を対象とした、小学校の教室を大学と結んだ実践「オンラインによる出前授業(学生の演奏による音楽鑑賞教室)」¹⁾がある。そこでは、授業の円滑な進行、マイクやウェブカメラのセットの方法を含め、技術的なノウハウを得ることができた。さらに、本実践の直前に行った、市部とへき地との合同学習²⁾で得たノウハウも活用して行うことにした。

本実践は、北海道宗谷管内と岡山県北部山間部という、距離の大きく離れたへき地の学校同士、さらに大学とオンライン会議システムで結んだ形で行う(【図1】参照)。



【図1】複数の小学校と大学を結ぶ

そのことで、へき地の音楽授業に関わる人的資源の補助や児童の学習環境に変化をつけることによる意欲向上等に資する刺激をねらった。『豊かな心を育むへき地・小規模校教育 少子化時代の学校の可能性』³⁾には、へき地の学校環境を積極的に生かすことが主張されている。そのことを念頭に置きつつ、固定したメンバーによる考えの多様性の乏しさや、少ない刺激に起因する学習意欲の低迷といった課題の克服を目指した活動を企図した。その際、本実践では「集合学習」⁴⁾の考え方を取り入れる。集合学習は、例えば児童数の少なさに起因する体育(球技等)や音楽(合奏等)の授業が制約される状況の緩和のため取られる方法である。これらの特徴的な方法である「全習」⁵⁾と「分習」⁶⁾を1単位時間に組み込んだ学習とする。

なお、「合同学習」「交流学习」としなかったのは、「平成29年度の弟子屈町立奥春別小学校における集合学習の公開」⁷⁾の実践例から着想を得て、「全習」と「分習」とを組み込むことによる。元来的に、「集合」の英訳には、「gather」

や「assemble」、会合するといった意味が含まれており、本実践の協同的な特徴、すなわちコラボレーションにもつながる概念である。本実践で扱うミュージッキングでは、短い時間であっても協同が可能であると考えた。

なお、オンラインで異なる学校を結ぶ実践は、一定の成果を上げつつも、例えば接続するアカウントが数か所ともなると、「子供の顔は極端に小さくなり、感覚として『顔を見る』のではなく『画面を見る』になってしまう⁸⁾」という問題が指摘されている。その克服のためにも、画面より音声（サウンド）が重視され、互いの作品を聴き合うことを生かすよう配慮した実践とする。

以上のことを踏まえ、本実践では、異なるへき地・小規模校に通う児童同士が、交流活動や意見交換をしながら学ぶようにする。オンライン会議システムを活用した音楽の授業を、双方のへき地校においてそれぞれが積み重ねてきた経験を生かすことを考慮しつつ、本実践以前から双方の学級に関わってきた大学教員による支援や指導を伴う形で、双方の学級の経験の拡張を、また、交流を行うことを企図した。へき地の学校環境を積極的に生かすことを念頭に置きつつ、固定したメンバーによる考えの多様性の乏しさや、少ない刺激に起因する学習意欲の低迷といった課題の克服を目指した実践を行い、へき地の人的資源の補助や、児童の学習環境に変化をつけることによる意欲向上等に関する効果についての示唆を得ることを目的とする。

2 各校の経験

(1) 岡山県真庭市立中和小学校^{ちゅうか}*ーミュージッキング

(*以降「中和小学校」と表記する)

「ミュージッキング」は、クリストファー・スモール(Christopher Small)が提唱した、音楽を現在進行形で表し、人間の行為として捉え直す、古くて新しい概念である。ミュージッキングでは、音楽をモノや作品として認識するのではなく、どのような立場からでも、誰でも音楽に関わることができる⁹⁾とされる。ミュージッキングでは、舞台等で繰り広げられる音楽のパフォーマンス以外にも、例えば聴取や練習、即興を含む作曲や身体表現等も、全て音楽する行為に含まれる⁹⁾。

元来的に、音楽は、個々の音楽経験や知識や技能のレベルに依らず、誰もが当たり前に参加する地域社会の関わり合いのツールの一つだった¹⁰⁾。西洋音楽を例に挙げれば、古代ギリシャのムーシケーには、詩と音楽、そして舞踊が包括的に含有されていた。また、身近な例としては、様々な宗教の儀式や地域のお祭り等に見るように、音楽には、作曲や演奏、鑑賞のような専門や領域による区別は存在せず、作曲する人も演奏する人も、あるいは踊る人も、異なる立場で参加して共有する存在だった¹¹⁾。

この方向性は、クリストファー・スモールが提唱した「ミュージッキング」の概念と一致する¹²⁾。スモールは、歌唱や器楽合奏を通して演奏や即興を行う人間の営みの一

つとして広義に音楽を捉え直している。音楽は「作品」ではなく、音楽する行為そのものであり、それは「演奏することでも、聴くことでも、練習することでも、作曲することでも、踊ることでもいい」と定義されている¹³⁾。

音楽を行為と捉えるミュージッキングの理論的な源流は、1990年代に北米を中心として広まったプラクシスの哲学的概念に見出すことができる¹⁴⁾。従来型の美的音楽教育を批判的に捉え、個々の児童・生徒が音楽する行為を通してアイデンティティを形成し、実践共同体が創生され、ひいては音楽を通して人間的な成長に導くことができるのである¹⁵⁾。エリオットは、アリストテレスの哲学に立脚し、行為の中の省察に見る相互的・即興的な関わり合いを含むプラクシスの方向性で音楽を捉え直し、演奏や創作、身体表現等の行為そのものが音楽であると位置付けた¹⁶⁾のである。

筆者等は、声楽・ミュージカルやオーケストラ演奏家、さらに学校現場の授業実践や実践研究、地域のワークショップの経験を有しており、ミュージッキングを一つの概念的な枠組みとして、2016年から2021年に亘り、実践的研究としてワークショップを継続してきた。ミュージッキングを学校園の現場で実践する中で、教壇と児童生徒、舞台と客席を二分する、従来型のパフォーマンスの在り方が根付いている音楽教育の文化に若干の疑問をもつに至った。また、演奏家でもある筆者等は、専門家としての音楽経験や音楽学習経験を振り返り、音楽演奏をスポーツの競技のように捉え、厳しいオーディションやコンクール等、競争の中で、完成された作品の再現を目指して演奏するスタイルにも、少なからず抵抗を感じるようになってきた。そして、日本の学校音楽教育や教員養成においては、全国一律に標準化された学習内容を提供する反面、ともすると、音楽家としての専門性を生かすににくい根本的な課題が内在することも分かってきた。すなわち統一カリキュラムの厳格な運用が、音楽教師個人が扱える内容を狭めたり、児童生徒の興味関心に応えることを困難にしたり、カリキュラムを現場レベルで創造できなくしたりといった、負の側面が存在するということである。さらに幼児教育から生涯教育まで、特に音楽演奏教育の領域においては、スモールが批判する「コンサートホールモデル」が支配的な側面¹⁷⁾もあると考えられる。

ここ数年は、ミュージッキングの実践を積み重ね、ユニバーサルデザインや異なる他者がともに音楽で関わり合うことや、共生をテーマとし、異なる興味関心や技能、音楽経験を有する他者同士が誰でも参加し関わり合える実践的モデルを構築してきた。上記一連の実践は、『音楽教育学』で毎年報告¹⁸⁾をし、『共生科学』においては、ユニバーサルデザインの観点を取り入れた実践的モデルとして検証した¹⁹⁾。以降も、ミュージッキングの学校園や地域活動への応用を実践的に研究し、誰しものが参加して、ともに学び関わり合える音楽活動を開発し、検討を加えてきた。

現段階では、筆者等が想定する「ユニバーサルなミュージッキングが、学校教育という制度においては実践されに

くい／されていない²⁰⁾と示されている。西島(2020)は、音楽教育分野のみならず、音楽療法、文化人類学、芸術社会学を含む広域科学の中でミュージッキングを捉えた上で、「ミュージッキングの音楽科における可能性」について言及し、ミュージッキングのもつ多様性を整理し、音楽授業への導入の可能性を示唆している²¹⁾。しかし、ミュージッキングにまつわる多くの研究は、現段階では哲学的な探索にとどまり、実践事例を扱った研究はまだ不足しているといわざるをえない²²⁾。

中和小学校と筆者(壽谷・安久津)等の関わりは、2019年に遡る。地域の図書館で、真庭市内の幼児と児童の親子15組を対象にした音楽ワークショップを催し、エリック・カール作の『うたがみえるきこえるよ』²³⁾を題材に、多様な楽器や声、身体表現で参加できる音楽ワークショップを実践した。エリック・カールは『はらぺこあおむし』²⁴⁾等の作品を通して、日本でも広く愛されている絵本作家だが、この実践におけるミュージッキングでは、言葉が介在しない『うたがみえるきこえるよ』を題材に設定した。

様々な楽器を用いて90分の間に分担を決め、楽器演奏以外にも身体表現も加え、さらに場面の解釈の言葉化、練習、最後に通すという流れで実施された。

その際、グループごとに各幼児や児童が得意とする表現媒体を音楽に限定せずを選択できることとした。身体表現に経験がある児童は音楽と動きをもって関わり、音楽が得意な者は楽器練習に勤しむ形で参加した。ワークショップ開始時には、十分に楽器の音を探求できる時間を確保し、その中で生まれた興味・関心も加味し、90分という限られた時間で、各自が課題を開発して、他者と共同する挑戦的な試みとなった。

この実践を皮切りに、図書館から車で30分ほどの山間部に位置する小学校に、定期的に訪問するようになり、ヴァイオリン体験会や『きらきら星』を題材にしたミュージッキングを複数回行った。

以下に、これまでの実践に見られたミュージッキングモデルの応用例として、筆者等が中和小学校に赴き、90分間のヴァイオリン体験授業を担当した際の事例を掲出する。短時間の実施で、弦楽器の音の探求やアンサンブル、簡単な楽曲の会得を可能とするプロトコルを適用したが、想定外にミュージッキングが喚起された事例である。同校の教職員によるまとめ²⁵⁾は以下の通りである。

先生のピアノに合わせて、みんなで『きらきら星』の演奏に挑戦しました。わずか1時間の練習なのに『きらきら星』のメロディーがふんわりと教室の中に広がり、同時に、「みんなでやっている」という温かい空気も広がっていきました。

さらに、もっと難しい『カノン』にも挑戦しました。6年生がヴァイオリン、その他の子ども達が「ドレミパイプ」「ハンドベル」「声」、5・6年担任の先生がコントラバスを担当しました。いきなりの挑戦でした

が、見事に『カノン』のメロディーを奏でることに成功しました！

このことから、音楽を学ぶ共同体が育まれた様子や、音楽の活動に様々な方法で関わった様子が見て取れる。また、児童の感想²⁶⁾は以下の通りである。

- ・ヴァイオリンを弾くのは難しかったけど、ドドソソラソができてよかったです(2年生男子)。
- ・最初は全然できなかったけど、チームの人に教えてもらって最初の部分が弾けるようになりました(3年生女子)。
- ・みんなでベルを鳴らしたり、踊ったり歌ったりして楽しかった(3年生男子)。
- ・ピアノは鍵盤を押せば音が出ますが、音を探すのが難しいけれど楽しいと思いました(5年生女子)。
- ・ピアノはその音の鍵盤を押せば音が出るし、リコーダーも抑えるところが決まっているけど、ヴァイオリンは4本の弦で音を作るのが難しいけれど楽しかった(6年生女子)。
- ・先生が弾くと同じ楽器と思えないほど綺麗な音が出ていて、すごいなあと思いました(6年生女子)。

この実践に関して特筆すべきは、『カノン』の演奏時に、偶発的に、コントラバスやドレミパイプ、ハンドベル、声や動きを含む、ミュージッキングの要素を取り入れた全員による合奏が、当初の想定範囲外で展開されたことである。その場面に関する記録(筆者・安久津による)は、以下の通りである。

筆者(安久津)がヴァイオリンの音域について説明していたときのこと、男子児童Cが、「ヴァイオリンはここまでしか低い音は出せない」とデモンストレーションを交えて説明し、さらに低い音をピアノで鳴らして見せた。それらの低音域はヴィオラやチェロ、コントラバスを用いれば出せる音であることを説明し、楽器の家族のように合奏できることを伝え、Cは教室後方の準備室を指差し、筆者(安久津)に「あるよ!」といった。担任教諭Dは慌てて「先生のお話を聞いて」と制止したが、筆者(安久津)がコントラバスかチェロが準備室にあるのではないかと感じ、「もしかしてチェロがあるかな」と、準備室の室内を見回した。Cも得意気に準備室に入り、「あった」と指さす先に、コントラバスが置いてあった。その後、グループワークとして、筆者(壽谷)等が『きらきら星』の演奏方法について考えたり練習したりしている間に、筆者(安久津)がコントラバスの調弦をした。最後に、コントラバスの体験を経て、カノンの合奏では、2音で伴奏ができる手法を用いて、多様な楽器や表現を組み合わせて合奏することができた。

以上のように、児童の声を聞くことで、計画は変更を迫られたが、より多様な個性、興味関心を生かしたミュージッキングの事例となった。

(2) 浜頓別町立浜頓別小学校**一連詩

(**以降「浜頓別小学校」と表記する)

「連詩」は、複数の人が共同で次から次へ詩を書き、一つの詩へとつながった形にしていくという遊びである。即興で行い、誰かが書いた一行に続けて、また他の誰かが書き、さらにまた他の誰かがつないでいくという方法で進める。「詩を作るという創作活動は、個人の活動として行われることがほとんどである。この個人の活動をグループで行ったらどうであろう。『連詩』はグループで詩を創作する活動である。人の言葉を聞いて、その言葉をもとに自分なりにイメージを広げ、それを言葉として発信していくのである」²⁷⁾との主張に基づいて活動を行う。この方法で詩を作っていくと、個人作業として取り組む場合と比べ、はるかに効率よく、また、個々の進行状況や出来栄えに大きなばらつきが見られなくなる利点がある。

例として、「夏」をテーマにした連詩の実践の様子を掲出する²⁸⁾。

- ・「夏といえば？」と問いかけ、キーワードを集める
- ・「海」「スイカ」「プール」「キャンプ」「かき氷」等の言葉が次々に出される
- ・リズム（手拍子の四拍）に乗せて言葉を言う（「これらの言葉を参考にして、つくってみましょう」）
- ・1人目「熱中症に気を付けよう」が即興で発語される
- ・その一行につないで、次の人が、またリズムに乗せて言葉を言う
- ・その際、手拍子に乗せて、1人目の言葉、1人目の言葉→2人目の言葉、1人目の言葉→2人目の言葉→3人目の言葉…、という具合に、毎回一行目から言うことと、考えすぎず即興で言うことをルールとして続ける
- ・全員「熱中症に気を付けよう」→2人目「スイカで水分補給だね」
- ・全員「熱中症に気を付けよう」「スイカで水分補給だね」→3人目「スイカに塩を振ってみよう」
- ・全員「熱中症に気を付けよう」「スイカで水分補給だね」「スイカに塩を振ってみよう」→「熱中症、ああ、熱中症」
- ・つくった作品を読んでみる。取りあえずつくった後に、例えば、「スイカ」がだぶっているから言葉を替えてみよう、という具合に推敲する

以上のような展開によって、4拍（1拍には最大で十六分音符4個分）4行の詩をつくっていく。これを国語における詩の単元の学習に、自分たちも詩をつくってみる活動を組み込む形で実践してきた。

3 活動の構想

〈2 各校の経験〉で述べた、双方の学級の経験を互いに拡張させるために、〈2 (2)〉で述べた「連詩」と〈2 (1)〉で述べた「ミュージッキング」とを結びつけた活動を構想する。まず、以下に記す(1)で、それらの接続のために取り入れる「ふしづくり」について、続いて(2)で、活動の基本構成について触れる。

(1) ふしづくり

「連詩」と「ミュージッキング」とを接続する活動として取り入れる「ふしづくり」の実施方法は以下の通りである。

- ・つくった詩を、口を閉じた状態で音読する。さながらハミングのようになるが、その際、抑揚（イントネーション）を書き取っていく。このとき、児童の居住する地域の方言の抑揚を優先する。例文の「ねっちゅうしょうに、きをつけよう」は「_ _ _ _ _、_ _ _ _ \」となる
- ・使用する音はド・レ・ミ・ソ・ラ（四七抜き音階）の民謡旋法（ラで終止する）とする²⁹⁾。なお、本実践ではヴァイオリンを使用するため、ソラシレミに移調した形でふしづくりを行う
- ・前段で確認した抑揚に沿って、上記の音をつないでいくことで旋律をつくっていく。例えば、「ねっちゅうしょうに、きをつけよう」は「_ _ _ _ _、_ _ _ _ \」であるから「ミソソソソソ、ラドドドラ（シレレレレレ、ミソソソミ）」という具合である
- ・音が決定されたら、リズムを考えて、ふしを完成させる

(2) 活動の構成

本実践は、まず「連詩」で歌詞をつくり、続いて「ふしづくり」で歌として完成させ、それを題材に「ミュージッキング」へと発展させるという展開で行う。

4 実践の記録

日時：令和3年7月13日10:30-12:05（概ね3-4校時）
 児童：浜頓別小学校4年生16名
 中和小学校5・6年生7名
 指導：TTによる。主担当（MT・主に全習時）は芳賀均、分習時は各学級担任、音楽指導時の支援は壽谷・安久津・芳賀均

次	形	活動	留意点等
事前	分習	○詩をつくる際に用いるキーワードを考えておく ※キーワードは欄外参照	・両地域の特色と地名を入れる

第一次	全習	○連詩をつくる	・各学級 ・4行の連詩
第二次	全習	○ふしづくりを行う ・第一次でつくった詩にふしをつける	・ト調ヨナ抜き音階(レミソラシレミ)のミ旋法
第三次	全習	○ミュージッキングについて理解する	・歌唱、楽器、身体動作、絵等でみんなで参加して表現に関わる
	分習	○ミュージッキング ・つくった歌をもとにする ・表現方法を考える	・浜頓別小学校=絵を交えたミュージッキング。身体表現、オルフ鉄琴、リコーダー、打楽器等を用い、歌唱を伴った演奏とする ・中和小学校=ヴァイオリン、身体表現、打楽器、絵を交えたミュージッキング。ハンドベルや、コントラバスも用いる
	全習	・途中経過を発表し合う ・意見交流をする	・各担任から、どんなアイデアが出たか、どんなことをするか等について話す ・児童に感想を聞く機会を設ける
第四次	分習	・表現を練り上げ、発表に向けて練習する	・指揮等、教師も必要に応じて参加する
	全習	○発表会を行う ・まず、相互発表を行う ・続いて、相手の表現に合わせて踊りながら鑑賞する	・二回発表を行う ・二回目は相手の表現に合わせて踊り、一体感を味わう

※事前に考えておいたキーワード

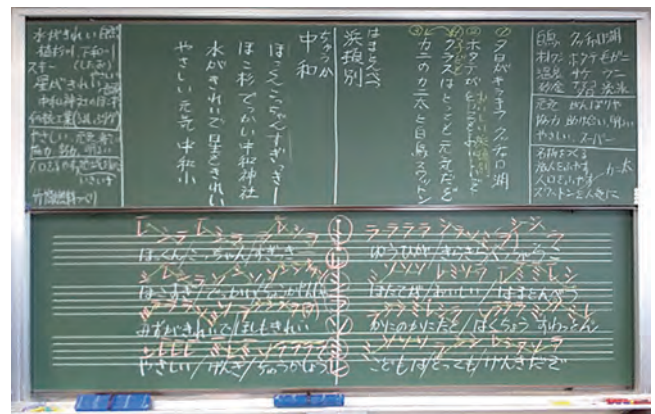
○浜頓別小学校4年生

- ・クッチャロ湖 ・クッチャロ湖の夕焼け ・ホタテ
- ・自然がいっぱい ・毛ガニ ・サケ ・白鳥 ・砂金
- ・温泉 ・元気 ・助け合う ・明るい
- ・かに太とスワットン(町のマスコット) 他

○中和小学校5・6年生

- ・植杉川 ・下和川 ・水がきれい ・星がきれい
- ・中和神社のほこ杉 ・冬はスキー ・伝統工芸
- ・竹筒燃料づくり(竹と籾殻を使った燃料づくり) 他

実践時の板書は、【図2】のとおりである。



【図2】授業の板書

5 授業に参加した教員等の感想

活動時の各学級の様子および参観者の感想は、以下のようであった。

(1) 浜頓別小学校の活動の様子

浜頓別小学校での様子は、以下の通りである。実践に参加した筆者(芳賀真衣)が以下の様に示す。

歌詞は、代表児童がその場で考えたが、他の児童も「いいね、いいね」というつぶやきをたくさんしており、みんなが納得の歌詞を即興でつくることができて、嬉しかったようである。MTの修正も適切(児童が「あ! それいい!」と反応していた)で、児童の大雪にしたい事柄や意見が尊重されており、よかった。

ふしづくりでは、イントネーションを書き取って、それに沿って音の高低(上下)を考えてふしをつくっていくという流れを、児童もしっかりと理解した上で活動できていたのが、充実感につながったのではないかと思います。また、全員を一人ずつ指名して音を決めたが、不安や重圧を感じることなく、かつ「ほくが決めた音が採用されて、しかも聴いたらいい感じ!(発言ママ)」という形で実現されていてよかった。完成してフレーズごとに演奏されたのを聴く都度、児童は「わあ! すごくいい!」と、

盛り上がっていた。

(2) 中和小学校の活動の様子

中和小学校での様子は、以下の通りである。実践に数年間定期的に参加してきた筆者（安久津）が以下の様に示す。

児童は最初、全く初めて画面越しで接する浜頓別の児童を前に、普段と比べてやや緊張した面持ちだった。しかし、MTの授業のテンポがよく、誰でも参加できる連詩とふしづくりを融合させた活動、そして、その後の中和小学校だけの楽器演奏の方法の探求や歌を創作する活動が始まると、すぐに場が和んだ印象を受けた。男子児童Eはヴァイオリンを黙々と探求し、別な男子児童Fはコントラバスの双方の手ほどきを受け、女子はチームで詩の創作、そして筆者（壽谷）の手ほどきで、歌と身体表現を創作した。さらに背景画も工夫した。そこに最終的に、楽器と歌、身体表現が融合したコラボレーションが達成された。画面越しに北海道の様子を意識することで刺激が多かったと思われ、全く異なる歌詞やオーケストラレーションを有する演奏に接し、児童は口々に感嘆や迫力ある演奏に感嘆を漏らしていた。また時間最後には、北海道の演奏に合わせて身体表現を加えるなど、参加も促されていた。

(3) 授業をオンラインで視聴した研究者の感想

① 浜頓別小学校および遠隔による出前授業と関わりのある研究者のコメント

筆者（芳賀均・芳賀真衣）の浜頓別小学校における活動と関わりのある研究者³⁰⁾からは以下のような趣旨のコメントを得た

- ・ 2つの教室をつないでの作曲の授業であった。作詞と作曲をして、その授業内で演奏する楽器を決めて合奏するという、自由度の高い授業だった。自由度が高い中で、児童は「自分たちでつくりあげる」という気持ちで取り組んでいたことが画面越しにも伝わってきた
- ・ 一つの決まった答えがあるわけではないので、児童も「正解を見つける」または「実はどこかに正解がある」といった発想では動いていなかった。これは、音楽に限らず、「主体的に取り組むための条件」であると感じた。
- ・ 作曲という活動は、明らかにおかしな曲調であれば、音楽に詳しくない子でも判断ができるので、個々の音楽的なスキルには差があるにしても、この授業に関してはねそういった差を感じずに子供たちも取り組んでいた
- ・ ミュージックキングという言葉は、音楽教育に携わっていない人たちにとっては、初めて聞く言葉である。「その場にいることでも、参加になる。場を共有することに意味がある」という視点は、集団を評価することの意味を考える機会となった

・ 評価というと、「個人について、外的な条件で判断をする」という発想がメインになっていると思う（道徳の授業研究も「個人をどのように評価するか」という発想になってしまっていることが多いと感じる）。しかし、「集団がどうあるべきか」という視点の方が、実は道徳の大きなテーマであって、そのための評価についても考えていなければならないと、この授業を見て考えた

② 中和小学校およびミュージックキングと関わりのある研究者のコメント

筆者（壽谷・安久津）の中和小学校における活動と関わりのある研究者³¹⁾からは以下のような趣旨のコメントを得た。

- ・ MTの場づくりが非常によい。ハッピーでポジティブである（（児童が何気なく行った）拍手を取り上げ価値づけ、笑顔と大きな動きで場を勇気づける）
- ・ 担任が裏方として大活躍、児童実態を理解していて、アイデアを吸い上げ、かつ方向づける。例：「ホタテがおいしい浜頓別」
- ・ 作品づくりという動機づけは、単なる知識獲得とは異なり、活用と探求を伴うものになっている
- ・ 意思決定や創造性、共同性を細切れにすれば、全体としての共同作業になる。個々人ではうまくできないことでも、全体では細切れの小さな部分の総和、社会貢献という大きな機械の部品になる
- ・ ミュージックキングは、その場にいるだけでも参加と見なされるが、その場にいること自体が社会参加になる参加のあり方を皆でつくり合うことになる。みんなで寄ってたかって作品に仕上げることに、自分も小さな部品として参加することの意味がある
- ・ 即興ででき上がっていく。誰か一人の精神ででき上がるわけではない

6 実践に関わる児童の感想の分析

実践に関わった児童の感想文、および、相手の学校の児童に対するメッセージ（データは実践当日に収集）について、SCAT³²⁾の方法を参考にして検討する。作業表については以下に掲出（分析資料1～4）する通りであり、結果は分析表に続いて記述する。

資 料：実践に関わった児童の「感想文」、および、「相手の学校の児童に対するメッセージ」

収集時期：データは実践当日に収集

分析方法：SCATの方法を参考にして質的に検討

分析資料1【感想（浜頓別小学校4年生）】

テキスト（原文ママ）	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	〈5〉疑問・課題
歌詞をその場でつくるのがすごかったです。	すごかった	作詞への関心とできた達成感	作曲への興味	作曲に対する興味・関心の向上	
とても楽しくて、賑やかでした。ありがとうございます。	とても楽しくて、賑やか	楽しさ／賑やか	やりがい／賑わい	やりがい／多人数による賑わい	
山岡県真庭市立中和小学校の皆さん、3、4時間目はありがとうございました。演奏ありがとうございました。またいっしょに演奏したいです。	またいっしょに演奏したい	また一緒に勉強したい	相手への関心	他校との学習への関心	
曲をつくるのが、すごくてのしかった。曲をあんなに早くつくれるとおもわなかった。自分たちも中和小学校のみんなも曲がきれいだった。	すごくてのしかった／曲をあんなに早くつくれるとおもわなかった／曲がきれいだった	作曲が楽しい、曲を身近に感じた、どちらもよかった	作曲への関心、自他の作品の比較、達成感	作曲への興味・関心の向上、自他の作品の比較による学び、達成感	
中和小学校の5、6年生と同じくらいできたと思いました。最初は緊張したけど、どんどんなれてきました。	同じくらいできた／最初は緊張した／どんどんなれてきた	上級生と比較し達成感、交流に慣れた	自信、達成感、交流による経験	自信、達成感、交流による経験	
色々な事がすごく楽しかった!! またやる時がある日もう一回したい!!	すごく楽しかった／もう一回したい	楽しい、また一緒に勉強したい	やりがい、相手への関心	やりがい、相手への関心	
クラスで作った曲を他の人にも聞かせたいです。	他の人にも聞かせたい	曲の完成度に対し満足できた	達成感	活動の達成感	
自分たちで曲作りできるとは思わなかったです。岡山県の人といっしょに授業するのがとても緊張しました。だけど、上手な曲ができたのですごく楽しかったです。	とても緊張した／上手な曲ができた／すごく楽しかった	完成した曲への満足感、楽しい	達成感、満足感	活動の達成感、満足感	
僕たちにすてきな曲の作り方を教えてください、ありがとうございます。授業の全部が楽しかったです。またやりたいです。あと100回ぐらいやりたいです。	楽しかった／またやりたい	楽しい、また一緒に勉強したい	やりがい、相手への関心	やりがい、相手への関心	
歌を作るのが楽しかったです。難しいかと思ったら簡単でした。またいつか歌を作れるときは、また演奏したいです。	楽しかった／また演奏したい	楽しい、またやりたい	やりがい、学習意欲	やりがい、学習意欲	
最初は、できるか心配だったけど、できたから、よかったです。演奏するのが、楽しかったです。	できるか心配だったけど、できたから、よかった／楽しかった	作曲に満足できた、楽しい	達成感、やりがい、演奏への興味	達成感、やりがい、興味	
自分たちで曲をつくれると思わなかったです。岡山県の5、6年生とべんきょうをするのも楽しかったし、上手な曲も作れたので楽しかったです。	曲をつくれると思わなかった／岡山県の5、6年生とべんきょうをするのも楽しかった／曲も作れたので楽しかった	他校との合同授業が楽しい、作曲への興味・関心の向上	相手への関心、やりがい	相手への関心、活動のやりがい	
あの時間で、曲を作れると思わなかったの、びっくりしました。できた曲は、明るくていい曲だと思いました。	曲を作れると思わなかった／できた曲は、明るくていい曲	作曲に対するイメージの変化、曲の完成度に対する満足	イメージの変化、満足感	作曲に対する印象の変化、満足感	

歌作り楽しかったです。特に演奏が楽しかったです。私は歌が苦手なので、絵を書くかかりをしました。絵を書いている時に歌を聞いたらすごくいい曲でした。でも、岡山県中和小学校の曲も、すごくいい曲でした。	楽しかった／すごくいい曲	楽しい、曲の完成度に対する満足、相手校への良い評価	やりがい、自他の作品の比較による評価	相手への関心、活動のやりがい	
自分たちで作った曲がいい曲でうれしかったです。バイオリンをひいてみたいです。	作った曲がいい曲でうれしかった／新たなものへの興味が沸いた	曲の完成度に対する満足、新たなものへの興味	満足感、新たなものへの興味	満足感、相手の活動内容への関心、学習意欲	

ストーリーライン（現時点で言えること）	本実践を行った4年生は、他校の児童と関わることにより、多人数による賑わいを楽しみ、相手や、相手の活動に関心が高まっている。作曲ができた達成感や、自他の作品の比較による学びにより学習意欲が向上している。また、作曲を、より身近に感じるようになった				
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> ・他校の児童と関わることにより、多人数による賑わいを楽しみ、相手や、相手の活動に関心が高まった ・作曲ができた達成感や、自他の作品の比較による学びにより学習意欲が向上した ・授業により作曲を、より身近に感じるようになった 				
さらに追究すべき点・課題					

分析資料2【浜頓別小学校4年生から中和小学校5・6年生のみなさんに向けてのメッセージ】

テキスト（原文ママ）	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	〈5〉疑問・課題
音がきれいだったので、私もひいてみたいと思いました。またいっしょに授業したいです。	私もひいてみたいと思いました／またいっしょに授業したい	興味・関心が湧いた、また一緒に勉強したい	学習意欲の向上、相手への関心	学習意欲、相手への関心	
中和小学校のみなさん今日は、一緒に勉強をしてくださりありがとうございました。	ありがとうございます	相手への感謝	相手への関心	相手への関心	
中和小学校の皆さんが演奏した曲、すごく音色がとてもきれいでした。またいっしょに、お勉強をしましょう。	またいっしょに、お勉強をしましょう	また一緒に勉強したい	相手への関心	相手への関心	
歌凄く美しかったです。またいつかもう1回聞きたいです。	歌凄く美しかった／もう1回聞きたい	完成した曲がよかった、また一緒に勉強したい	達成感、相手への関心	達成感、満足感、相手への関心	
きょうはありがとうございました。きょうはすごくたのしかったです。ありがとうございました。	すごくたのしかった	楽しい	楽しさ	楽しさ	
またいっしょにやりたいです。	またいっしょにやりたい	また一緒に勉強したい	相手への関心	相手への関心	
浜頓別に来てみてください!!	来てみてください	また会いたい	相手への関心	相手への関心	
バイオリンが、じょうずでした。	じょうず／相手を褒める	相手を褒める	相手を称賛する	相手への敬意	
とっても素敵な曲を作っていてすごいと思いました!! めちゃくちゃ楽しかったです!あと、何回も何回も一緒に授業をやりたいです!本当に本当にありがとうございました!! 今日一日ありがとうございました!! 一緒に勉強できて楽しかったです。	素敵な曲を作っていてすごいと思いました／何回も何回も一緒に授業をやりたい／一緒に勉強できて楽しかった	作曲への興味・関心の向上、また一緒に勉強したい、楽しい	イメージの変化、相手への関心、活動のやりがい	発見、達成感、相手への関心、活動のやりがい	

今日は時間を頂きありがとうございます。また一緒にやりたいです。	また一緒にやりたい	また一緒に勉強したい	相手への関心	相手への関心	
ズームで会うのではなく、本当にあってみたいですね。	本当にあってみたい	実際に会ってみたい	相手への関心	相手への関心	
岡山県中和小学校さん、作った曲すごくいい曲でした。はまとの曲はどうでしたか。歌作りすごく楽しかったです。	すごく楽しかった／すごくいい曲でした	楽しい／相手の作品を褒める	やりがい／相手を称賛する	やりがい／相手への敬意	
5、6年の皆さんありがとうございます。素敵な演奏をありがとうございます。	ありがとうございます／素敵な演奏	感謝／相手の作品を褒める	相手を称賛する	相手への敬意	
一緒にできて楽しかったです。またやりたいです。曲が全然違ったけど、どちらもいいなと思いました。	一緒にできて楽しかった／曲が全然違ったけど、どちらもいいなと思いました	共同授業が楽しい、相手校へのよい評価	共同授業に対するやりがい、自他の作品の比較による評価	やりがい、自他の作品の比較による評価	
中和小学校の5、6年生の皆さん、今日は一緒に授業をしてくれてどうもありがとうございました。演奏を聞いてみて、僕たちの演奏の雰囲気は違ったけど、きれいだなと思いました。	僕たちの演奏の雰囲気は違ったけど、きれいだなと思いました	相手校へのよい評価	自他の作品の比較による評価	自他の作品の比較による評価	
本当にありがとうございました!! できればまたしてください!!	ありがとうございました／またしてください	また一緒に勉強したい	相手への関心	相手への関心	

ストーリーライン（現時点で言えること）	自他の作品の比較による評価を通して、相手への関心や敬意をもったり、活動の達成感によって学習意欲の向上につながったりしている。それらのことから、授業は充実したものになったといえる
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の作品の比較による評価を通して、相手への関心や敬意をもった ・活動の達成感によって学習意欲の向上につながった ・授業が充実したものになった
さらに追究すべき点・課題	

分析資料3【感想（中和小学校5・6年生）】

テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	〈5〉疑問・課題
バイオリン交流授業をして、浜頓別小学校の4年生が上手に歌を作っていたり演奏していてすごいなあと感じました。バイオリンで、最初はとても難しかったけど安久津先生が優しく教えてくれたので、頑張ってひくことができてよかったです。	上手に歌を作っていたり演奏していてすごいなあと感じました／最初はとても難しかったけど安久津先生が優しく教えてくれたので、頑張ってひくことができてよかった	相手校へのよい評価、教員による補助で達成感が得られた	相手を称賛する、教師の支援により達成できた	相手への敬意、支援による達成感	
バイオリンの授業でむずかしい場所があったけどあくつせんせいに教えてもらいわかるようになったのでよかったです。	むずかしい場所があったけどあくつせんせいに教えてもらいわかるようになった	教師による支援で授業が円滑に進んだ	教師の支援により達成できた	支援による達成感	

浜頓別小学校の4年生と一緒に地域の紹介の詩を作りそこからみんなで歌を作って演奏できてとってもたのしかったです。それに、浜頓別小学校の演奏がとってもきれいでした。それに、バイオリンは、ゆみでひかず手でひきました。初めて手でバイオリンをひいたのでとても楽しかったです。また、バイオリンをひける機会があればまた、ひいてみたいです。	たのしかった／浜頓別小学校の演奏がとってもきれい／初めて手でバイオリンをひいたのでとても楽しかった／バイオリンをひける機会があればまた、ひいてみたい	楽しい、相手校への良い評価、また演奏してみたい	活動のやりがい、相手への関心、学習意欲	活動のやりがい、相手への関心、学習意欲の向上	
バイオリンが上手く引けなかったけどあくつ先生に教えてもらってひけるようになりました。そして、浜頓別小学校の4年生が上手に演奏していたので、すごいなと思いました。私も、バイオリンを、楽しめたので、良かったです。また、やりたいです。	あくつ先生に教えてもらってひけるようになりました／上手に演奏していたので、すごいなと思いました／楽しめた／また、やりたい	教師の支援で授業が円滑に進んだ、相手校へのよい評価、楽しい、また一緒に勉強したい	教師の支援により達成できた、相手を称賛する、活動のやりがい、相手への関心	支援による達成感、相手への敬意、活動のやりがい、相手への関心	
バイオリンをしてみて前とは違い、自分たちで、作ってあくつ先生などにアドバイスをしてもらいながら楽しかったです。でも、じかんと過ぎてしまったので今度はすらすらできるようにしたいです。北海道の人も、きれいに演奏していてすごかったです。	楽しかった／今度はすらすらできるようにしたい／きれいに演奏していてすごかった	楽しい、意欲が生まれた、相手校へのよい評価	活動のやりがい、学習意欲、相手を称賛する	活動のやりがい、学習意欲の向上、相手への敬意	

ストーリーライン（現時点で言えること）	教師の支援の効果もあり、目的を達成できた児童が多く、達成感をもつことができた。またやりたいという言葉からも、活動に対する興味・関心が向上したといえる。相手をよく評価し、敬意をもち、関心も高まっている				
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の支援の効果もあり、目的を達成できた児童が多く、達成感を得ることができた ・またやりたいという言葉からも、活動に対する興味・関心が向上したことが分かる ・相手をよく評価し、敬意をもち、相手への関心も高まっている ・音楽に対する興味・関心が、高まった 				
さらに追究すべき点・課題					

分析資料4【中和小学校5・6年生から浜頓別小学校4年生のみなさんに向けてのメッセージ】

テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	〈5〉疑問・課題
浜頓別小学校の4年生のみなさんが作った歌はとてすごいと思いました。浜頓別の良いところが伝わりました。	作った歌はとてすごいと思いました	相手校へのよい評価	相手を称賛する	相手への敬意	
みなさんが演奏している様子が、とても明るくて見ていると楽しくなりました。	見ていると楽しくなりました	相手校へのよい評価	相手を称賛する	相手への敬意	
本当にありがとうございました。また交流できたらうれしいです。	また交流できたらうれしい	また一緒に勉強したい	相手への関心	相手への関心	
浜頓別小学校の皆さんの作った曲はきれいな音を出していたのでいいなと思いました。	きれいな音を出していたのでいいなと思いました	相手校へのよい評価	相手を称賛する	相手への敬意	

また近いうちにリモートで交流しましょう。	また近いうちにリモートで交流しましょう	また一緒に勉強したい	相手への関心	相手への関心	
一緒に交流をしてくれて、ありがとうございました。	ありがとうございました	相手への感謝	相手への関心	相手への関心	
浜頓別小学校さんが、作った曲には、浜頓別のいいところがたくさん入っているし、演奏もすごく揃っていてきれいでした。	きれいでした／浜頓別のいいところがたくさん入っている	相手校へのよい評価／よい作詞	相手を称賛する	相手への敬意	
ありがとうございました。また交流してください。	また交流してください	また一緒に勉強したい	相手への関心	相手への関心	
浜頓別小学校4年生が、歌ったのは、とても北海道らしい曲で、凄いなと思いました。	凄いなと思いました	相手校へのよい評価	相手を称賛する	相手への敬意	
浜頓別小学校の歌を聞いていて明るい曲で、たのしくなりました。	明るい曲で、たのしくなりました	相手校へのよい評価	相手を称賛する	相手への敬意	
また交流会があったら、一緒に勉強したいなと思います。	また交流会があったら、一緒に勉強したい	また一緒に勉強したい	相手への関心	相手への関心	
こちらでは聞いたことのない、食べ物や、場所が出てきてワクワクしました。浜頓別の名物を、歌詞にしているし、いいなと思いました。色々な楽器が出てきてきれいな音色になっていてすごかったです。またどこかで交流をしたいです。	ワクワクしました／すごかった／浜頓別の名物を、歌詞にしているし、いいなと思いました／またどこかで交流をしたい	よい作詞／新たな発見・興味、また一緒に勉強したい	相手を称賛する／視野の広がり／相手への関心	視野の広がり、相手への関心・敬意	

ストーリーライン（現時点で言えること）	自分が知らなかった事柄に触れて、視野が広がっている。また、多くの児童に、相手をよく評価し、敬意をもち、相手への関心も高まった様子が見られる
理論記述	・相手の学校との交流によって、自分が知らなかった事柄に触れて、視野が広がった ・相手をよく評価し、敬意をもち、相手への関心も高まった
さらに追究すべき点・課題	

浜頓別小学校4年生の感想からは、他校の児童と関わることにより、多人数による賑わいを楽しみ、相手や、相手の活動に関心が高まっている。作曲ができた達成感や、自他の作品の比較による学びにより学習意欲が向上している。また、作曲を、より身近に感じるようになったことが読み取れる。また、相手の学校に対し、自他の作品の比較による評価を通して、相手への関心や敬意をもちたり、活動の達成感によって学習意欲の向上につながったりしている。それらのことから、授業は充実したものになったといえる。

中和小学校5・6年生の感想からは、教師の支援の効果もあり、目的を達成できた児童が多く、達成感をもつことができた。またやりたいという言葉からも、活動に対する興味・関心が向上したといえる。相手をよく評価し、敬意をもち、関心も高まっていることが分かった。また、相手の学校に対して、自分が知らなかった事柄に触れて、視野が広がっている。また、多くの児童に、相手をよく評価し、

敬意をもち、相手への関心も高まった様子が見られる。

6 本実践のまとめ

本実践では、異なるへき地・小規模校に通う児童同士が、交流活動や意見交換をしながら学ぶオンライン会議システムを活用した音楽の授業が、双方の学級の経験の拡張を、また、交流を行うことを企図した。へき地の学校環境を積極的に生かすことを念頭におきつつ、課題の克服を目指した実践を行い、へき地の人的資源の補助や児童の学習環境に変化をつけることによる意欲向上等に関する効果についての示唆を得ることを目的として行った。複数のへき地校をオンライン会議システムで結んだ集合学習による「連詩」「ふしづくり」「ミュージッキング」の実践においては、達成感や、自他の比較による学びによる学習意欲の向上、また、視野の拡大、相手への関心や敬意につながるものが示

唆された。

今後、各地のへき地・小規模校で、小回りの利くという特性を生かし、距離という、いわばハンディーキャップを乗り越えるためだけでなく、大規模の学級同士では行にくい、離れた異学級同士の密な学び合いを実現するための実践方法の一つとして提言としたい。

また、演奏の出来栄のみを追求する在り方とは異なり、極めて自由度の高い活動であるミュージッキングは、活動に対する心理的なハードルも低い。少人数であるがために、大迫力の合奏ができないとか、合奏指導等の音楽の実技指導に教員が困るものとは一線を画し、むしろ教員も一緒になって音楽を楽しむといった在り方が可能となる。そうした点において、へき地の音楽の授業とも親和性が高いと考えられる。遠隔会議システム等も積極的に活用し、こうした実践が盛んに行われることを願うところである。

註

- 1) 芳賀均・西山洋平・大野紗依・森健一郎・芳賀真衣 (2022) 「音楽出前授業の教員養成としての効果とオンライン出前授業」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』72 (2)、pp.275-288.
- 2) 日本音楽教育学会 第52回大会 オンライン大会 (R3.10.16.) における発表 (芳賀均・森健一郎・芳賀真衣・大野紗依 「へき地校等と大学とをオンライン会議システムで結んだ授業の実践—へき地校と市部の学校とによる集合学習の試み」)。
- 3) 川前あゆみ・玉井康之・二宮信一編著 (2019) 『豊かな心を育むへき地・小規模校教育 少子化時代の学校の可能性』学事出版。
- 4) 北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター (2021) 『へき地・複式・小規模教育の手引き—学習指導の新たな展開—』, p.63.に「近隣の複式学級の子どもを一か所に集めて各領域の指導計画の一部について学習をする。普段より多い人数で学習できるので、集団の中での練り合いなどが行いやすい。体育科のボールゲームなどでよく取り入れられている。集団で学習する関係学校の教師の協力教授組織 (T・T) を充実させる必要がある。事前の綿密な打ち合わせが不可欠」とある。
- 5) 同上書に「集合学習において、2校以上の児童生徒が共同で行う学習活動」と解説されている。
- 6) 同上書に「集合学習で、共同で行う学習の効果を高めるために、各校での事前事後の学習活動を行うこと」と解説されている。
- 7) 平成29年度第66回全道へき地複式教育研究大会釧路大会第6分科会、弟子屈町立奥春別小学校における集合学習の公開 (9月22日)。弟子屈町立和琴小学校4名、美留和小学校2名、奥春別小学校4名。第1・2学年。
- 8) 岡崎裕・橋本和輝 (2018) 「過小規模校における「集合学習」の取り組みに関する考察—大学による『地域支援学校プログラム』として—」『和歌山大学教職大学院紀要 学校教育実践研究』3。
- 9) C. Small (1998) *Musicking: The Meanings of Performing and Listening*. Middletown: Wesleyan University Press.
- 10) Dissanayake, E. (2015). *What are the Arts for?* Retrieved from: <https://www.youtube.com/watch?v=O5pWXpUyuKE> [2021.10.1.21:00閲覧]
- 11) 同上。
- 12) 同前掲9)。
- 13) 同前掲9)。
- 14) 小川昌文 (2015) 「マイミュージックを育て、つちかい、養う音楽授業」『音楽教育実践ジャーナル』12 (2)、pp.6-19.
- 15) 同上。
- 16) D. Elliott (1995) *Music matters: A new philosophy of music education*. Oxford University Press.
- 17) 同前掲9)。
- 18) 壽谷静香・中山由美・筒石賢昭山・芳賀均・中西 裕・岡田信吾・安久津太一 (2019) 「ユニバーサルデザインの器楽合奏ワークショップ—伝統楽器とテクノロジーとの共存をはかりながら—」『音楽教育学』48 (2)、pp.85-86.および、安久津太一・壽谷静香・筒石賢昭山・中西裕・中山由美 (2018) 「つなぐ・かさねる変奏曲を題材にした器楽合奏ワークショップ—伝統楽器とテクノロジーを融合させた合奏の試み—」『音楽教育学』47 (2)、pp.96-97.
- 19) 壽谷静香・リチャード.K.ゴードン・栗原清・竹澤栄祐・筒石賢昭山・中山由美・芳賀均・安居總子・安久津太一 (2021) 「ミュージッキングの実践を通じた共生の理念及び行為の中の省察の具現化」『共生科学』11、pp.55-67.および、壽谷静香・筒石賢昭山・安久津太一 (2019) 「ユニバーサルデザインの音楽教育：ミュージッキングの実践を通して」『共生科学』10、pp.67-76.
- 20) 西島千尋 (2020) 「音楽科におけるミュージッキング概念の応用可能性」『音楽教育学』50 (1)、p.19.
- 21) 同上書、p.13.
- 22) 同上。
- 23) エリック・カール／もりひさし訳 (1981) 『うたがみえるきこえるよ』偕成社。
- 24) エリック・カール／もりひさし訳 (1976) 『はらぺこあおむし』偕成社。
- 25) 真庭市ホームページ「中和小 バイオリン体験学習～安久津先生の授業～」 <https://kodomo.city.maniwa.okayama.jp/37732.html> [2022.1.4.17:34閲覧]
- 26) 同上。
- 27) 白石範孝 (2003) 「連詩に挑戦」『教育研究』58 (1)、不昧堂出版、p.85.
- 28) 芳賀均 (2017) 「国語と音楽の組み合わせによる授業—国語授業の方法を音楽授業に活用する試み

- 一]『北海道教育大学紀要（教育科学編）』67（2）、pp.A1-A11.
- 29) この五音音階は、都節や沖縄風といった感じに、地域や児童の実態に合わせたものを使用するとよいと考える。
- 30) 北海道教育大学釧路校教授・森健一郎による。
- 31) 横浜国立大学教授・有元典文による。
- 32) SCAT（Steps for Coding and Theorization）は、質的データ分析のための手法の一つである。4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法である。大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要（教育科学）』（第54巻第2号）名古屋大学大学院教育発達科学研究科、2008、pp.27-44./大谷尚『質的研究の考え方』名古屋大学出版会、2019.

[附記1]

本稿は、日本学校音楽教育実践学会 第15回 北海道支部例会（R4.2.11.オンライン開催）における発表（壽谷静香・芳賀均・安久津太一・芳賀真衣「複数のへき地校をオンライン会議システムで結んだミュージッキングの実践」）の内容と、日本音楽教育学会 第52回大会 オンライン大会（R3.10.16.）における発表（芳賀均・森健一郎・芳賀真衣・大野紗依「へき地校等と大学とをオンライン会議システムで結んだ授業の実践—へき地校と市部の学校とによる集合学習の試み」）のスライドの一部を再構成したものである。

[附記2]

本研究は、令和3年度北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター「へき地・小規模校教育に関する実践研究（個人調査研究費）」の適用を受けた。

[附記3]

作稿においては、〈1〉は壽谷と芳賀均が、〈2（1）〉は壽谷と安久津が、〈5（1）〉は芳賀真衣が、〈5（2）・（3）①〉を安久津が、それ以外を芳賀均が担当した。〈6〉のSCATの方法を参考にして行った分析は、盛田祥史氏の協力を得た。